
古代日本と 朝鮮・中国



直木孝次郎



直木孝次郎（なおき こうじろう）

1919年，神戸市に生まれる。京都大学文学部
史学科卒業。大阪市立大学文学部教授，岡山
大学文学部教授をへて，現在，相愛大学教授。
著書に『日本古代国家の構造』『壬申の乱』『日
本古代の氏族と天皇』『神話と歴史』『奈良』
『倭国の誕生』『飛鳥奈良時代の研究』『古代
史の窓』『歴史との出会い』『法隆寺の里』『夜
の船出—古代史からみた万葉集』などがある。



定価はカバーに表示
してあります。

こ だ い に ほ ん ち ょ う せ ん ち ゅ う ぐ ो く
古代日本と朝鮮・中国

なおき こうじろう
直木孝次郎

1988年9月10日 第1刷発行

2005年7月20日 第21刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 株式会社廣済堂

製 本 株式会社国宝社

© Kōjiro Naoki 1988 Printed in Japan

図〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写(コピー)
は著作権法上での例外を除き，禁じられています。落丁本・乱
丁本は，購入書店名を明記のうえ，小社業務部宛にお送りくだ
さい。送料小社負担にてお取替えます。なお，この本につい
てのお問い合わせは学術文庫出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-158845-1

古代日本と朝鮮・中国

直木孝次郎

講談社学術文庫

SONY®

目次

序・古代日朝関係史の研究をかえりみて	11
--------------------	----

I

一 朝鮮半島からの渡来人	20
--------------	----

1 アメノヒボコ伝承	20
------------	----

2 秦氏 はたうじ と大蔵 おおくら	25
--	----

3 難波・住吉と渡来人	32
-------------	----

4 吉備 きび の渡来人と豪族	47
--------------------------------	----

二 神功皇后伝説 じんくう の成立	76
----------------------------------	----

1 神功伝説と歴史的事実	78
--------------	----

2	神功皇后の実在性について	83
3	神功伝説の成立時期について	90

三	古代史のなかの江田船山古墳	107
---	---------------	-----

江田船山古墳の謎	古墳の年代	无利豆と
乎獲居臣	雄略天皇の時代	

四	古代朝鮮における間諜の活躍	118
---	---------------	-----

1	金庾信 きんぐしん と藤原鎌足 ふじわらのかまたり	118
2	金庾信と間諜	121
3	朝鮮の間諜のさまざまな例	125
4	古代日本の間諜について	132
5	新羅が日本にさしむけた間諜・迦摩多 かまた	134
6	間諜となつて国事に奔走した朝鮮の僧侶	138

II

一 定惠じょうえの渡唐——飛鳥・白鳳期仏教の性格に関する一試論……………146

1 定惠の経歴……………146

2 定惠の出家入唐にっとうの謎……………150

3 僧侶と政治……………156

4 国家仏教の思想……………161

5 鎌足の信仰と定惠の入唐……………166

6 定惠の死……………169

二 近江朝末年における日唐関係

——唐使・郭務棕の渡来を中心に……………175

1 唐使・郭務棕の来日……………175

2 天智朝末年の唐・羅・日の関係……………181

3	百濟難民輸送説……………	186
---	--------------	-----

4	威圧懷柔説・謀略部隊説……………	194
---	------------------	-----

5	救援の要請と捕虜の返還……………	200
---	------------------	-----

6	捕虜返還説の根拠……………	203
---	---------------	-----

三	奉翳美人——平城宮廷に演ぜられた唐風の舞……………	210
---	---------------------------	-----

文献にあらわれた奉翳美人 「美人」とは

男装した奉翳美人 男装の意味するもの

袍袴の舞の内容

四	日本と江南地方との交渉——鏡に秘められた謎……………	228
---	----------------------------	-----

1	日本と中国を結ぶ道……………	229
---	----------------	-----

2	呉の工匠渡来説への疑問……………	240
---	------------------	-----

3	王説と邪馬台国畿内説の関係……………	250
---	--------------------	-----

4	四、五世紀の日中の交渉	255
---	-------------	-----

五 日中文化の交流と鏡

—	海獸葡萄鏡と三角縁神獸鏡を中心	260
---	-----------------	-----

鏡のすきな日本人 高松塚と海獸葡萄鏡

法隆寺五重塔の心礎の鏡 三角縁神獸鏡の謎

呉工匠渡来説と特鑄説

〔付録〕

1	中国古代の都城をたずねて	276
2	漢長安城と未央宮前殿	286
3	泰山と大明宮含元殿	298

初出一覧	308
------	-----

索引	310
----	-----

古代日本と朝鮮・中国

序——古代日朝關係史の研究をかえりみて

中学・高校（ただし旧制）のころから、『万葉集』の歌や仏教美術を通して私は日本の古代に一種のあこがれと関心を抱いていた。いわばそれが昂じて大学で日本史を専攻することになったわけだが、日本史を選んだ原因の一つは、法隆寺金堂で拝観した百済くだら観音の美しさに感銘したことにある。それは別に書いたが（『わたしの法隆寺』塙書房）、一九四〇年の春、二十一歳であった。

このころとくに朝鮮や百済の文化に惹かれていたわけではなく、ただ純粹に百済観音の美に魅せられたのであるが、いま思い返してみると百済観音という異国を連想させる名称を持つことが、この仏像の鑑賞に微妙に影響したかもしれない。在来の日本的な美を否定するような大それた考えを持つてはいなかったが、人間二十歳前後は何とはなしに外国にあこがれを持つ。その外国のなかでも、百済は日本に仏教文化を伝えた国であり、千三百年前に亡び去ったはるかな過去の国である。一般の仏像とはちがう温雅で縹緲ひょうひょうとして、それでいて妙な

神秘性のないこの仏に、百済はぴったりの名称のように思われる。百済観音は私を現実から引きぬいて、美の世界に遊ばせてくれた。

百済観音の名は古くからのものではなく、初めて文献にあらわれるのは元禄十一年の『元禄諸堂仏体数量記』に、「虚空蔵菩薩百済より渡来、但し天竺像なり」とあるのが早い例である。百済渡来の仏像かどうかは明らかでないだけでなく、飛鳥時代の多くの仏像と同様にクスノキで制作されているところから、日本で刻まれた仏像とする説がむしろ有力である。しかし作られた場所の詮索はともあれ、この観音像は古代の百済文化へのあこがれをかきたてるものであった。

それ以前、父が雑誌『白樺』の愛読者であった関係から、朝鮮の美術を推賞して倦まない柳宗悦やなぎむねよしの名は子供の時からよく耳にしていた。これも朝鮮の文化に尊敬を抱く原因の一つであったかと思う。

しかし、日本が朝鮮を植民地として支配していた現実には、ほとんど疑問を持たなかったのは、当時の多くの日本人と同じであった。朝鮮のような弱い国は日本の保護下にあるのが幸福なのだという俗説を、私もおおむね信じていた。日本の歴史家のほとんどは、一九一〇年の「日韓併合」——事実上の朝鮮抹殺——に双手を挙げて賛成し、日本による朝鮮支配の正当化に努めていた。私の尊敬する朝鮮史学者三品彰英みなしなあきらむででさえ、一九四〇年に出版した『朝鮮

史概説』（弘文堂）では、朝鮮史の特色を他律性と捉え、他国の支配下にあるのが民族の宿命であるかのごとく説いている。かつての私もこうした朝鮮観の流れのなかにあつたといわざるをえない。

そのため、那珂通世の『上世年紀考』や、津田左右吉の『古事記及日本書紀の研究』を読んで、『日本書紀』の紀年になんか大幅な延長のあることや、『記・紀』の記事には、編者による潤色や造作の少なくないことは承知していたが、四世紀末以来、日本が朝鮮を侵略し、任那はもちろん百済や新羅を支配していたという正統的解釈は、ほとんどそのまま信じていた。

このかつての「定説」に疑問を持ちはじめたのは、日本の敗戦ののち、朝鮮に朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国という）と大韓民国が成立し、両国の学者や在日朝鮮人学者によつて、古代日朝関係についての従来の「定説」に対する批判的研究が発表されはじめてからである。

私の個人的な感覚では、それら批判的研究には二つの大きな波があつたように思う。第一の波は、共和国の学者金錫亨キムソクヒョン氏の「三韓三国の日本列島内分国について」に代表される。この論文は共和国の雑誌『歴史科学』一九六三年第一号に発表され、日本では『歴史評論』の一九六四年五、八、九号に鄭晋和氏の全訳が掲載され、村山正雄氏の全訳も同年九月に刊行

された。

論旨は周知のように、日本が朝鮮半島の百濟・新羅・任那（駕洛）を支配していたのではなく、これら諸国が日本列島内に分国を設置して支配・経営していたというのである。従来考えられていた日朝の支配、被支配の関係を逆転させた画期的な研究である。

これ以前、日本では、日本古代史について従来の通説を覆えすような研究がいくつも提出されて学界を賑わしたが、日朝関係については定説に挑戦するような研究はあまりなかったのではあるまいか。雑誌『日本歴史』の一九五八年八月、九月号に、「古代史の問題点をめぐって」という座談会が掲載されている。上田正昭・門脇禎二・関晃・平野邦雄・吉田晶、その他の諸氏に私も加わって意見を戦わせているが、そこでは四、五世紀におけるヤマト朝廷の朝鮮への進出・侵略が自明の前提とされ、奴隸の掠奪も論ぜられているが、異論を出す人はたれもなかった。

本書に収めた論文では、この座談会の翌年の一九五九年に発表した「神功皇后伝説の成立」がもつとも早い。これは神功皇后のいわゆる「新羅征討」の伝説の成立年代を推定しようとしたもので、津田左右吉の『記・紀』批判をさらに推し進めることをめざしたが、日朝関係については、日本が朝鮮半島南部を侵略し、支配していたとする在来の考えをあまり出していない。

ないし、その点についての批判は当時ほとんど受けなかったと思う。

そういう情況であつたから、金錫亨氏の分国論が日本の学界に与えた衝撃は大きかつた。しかし卒直にいつて史料の解釈に独善的なところが多く、結論を認めることはできなかった。けれども古代日朝関係で再考を要する問題が少なからず残っていることを示唆した点で、この論文の果たした功績は否定できない。現在、古代日朝関係史の中心として活躍しておられる坂本義種・鈴木靖民両氏の論文が精力的に発表されはじめるのが、ともに一九六七―六八年のころからであるのは偶然ではあるまい。金氏の説に触発されて、従来百済王から倭王へ献上されたことを示すと解されていた石上神宮藏の七支刀の銘文を、百済王から倭王への下賜を示すとする解釈が出され、熊本県の江田船山古墳出土の鉄剣銘（本文一〇八ページ）については、この鉄剣の所有者は百済の蓋鹵王（こうろ）に従属していたとする説が金氏によつて主張され、賛同する人びともあつた。

このように、古代日朝関係史の研究はこのころから活発になるが、私自身は積極的に朝鮮史を研究するには至っていなかった。そのうちに一九七二年の前後、好太王（広開土王）碑の問題が起こつた。これを私は朝鮮史研究を促進した第二波と考えている。

好太王碑というまでもなく高句麗（こうくり）の好太王の功績を記念するため、四一四年に建立された